

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02411

研究課題名(和文)19世紀真宗末寺の寺版の書誌学的研究 京都・大行寺信暁の著書を通して

研究課題名(英文) Bibliographical Study of the 19th Century Temple Publications on Shin-shu Temple; books of Shingyo at Kyoto Daigyo-ji.

研究代表者

膽吹 覚 (Ibuki, Satoru)

福井大学・語学センター・准教授

研究者番号：70362035

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：江戸後期に刊行された大行寺信暁の板本は1.大行寺蔵板本、2.本山佛光寺蔵板本、3.大行寺と本山佛光寺の相合板、4.町板、5.施本の5つに大別できる。そして、その弘通は大行寺や佛光寺、京大坂の本屋が中心であったが、信暁の親族や副業として本屋を営んでいた人も関わっていた。また、信暁の著書の研究を通して、江戸後期の京の本屋が、京や地方の町板・寺板の勤化本を売買し、新たな勤化本を編纂していたことが明らかになった。信暁の著書は明治に入っても整版小本や活版四六判で京大坂の書店を通して販売された。その理由には信暁の著書が通佛敎的な内容であったこと、そして時代背景として当時の説敎の隆盛が指摘できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は膽吹「大行寺信暁書誌目録」(平成29年)に記載された信暁の著書94点166種の書誌情報に基づいた研究である。ゆえに、そこから帰納的に考察された研究成果は学術的に見て実証的かつ客観的なものである。また、従来の寺院の出版に関する研究は各宗派の本山の出版が対象であったが、本研究は信暁が任職を勤めた大行寺という末寺の出版に焦点を当てた研究であり、その点においてこれまでの研究とは一線を画するものである。さらに本研究は江戸後期から明治中期という政治的な変動の中で、仏敎書の出版がどのように展開したかという問題について、信暁の著書を通して具体的に解明した点に意義が認められるであろう。

研究成果の概要(英文)：The books of Shingyo at Daigyo-ji published in the late Edo period can be broadly divided into;1.Hanpon(Hanpon;Japanese-style bound books) owned by Daigyou-ji;2.Hanpon owned by Honzan Bukkou-ji;3.joint publications of Daigyo-ji and honzan Bukko-ji;4.Machihan(bookstores's Hanpon) ;5.Sehon(books for given);Additionally,while the dissemination of Buddhist teachings was centered on Daigyo-ji,Bukko-ji,and bookstores in kyoto-Osaka,Shingyo's relatives and individuals who ran bookstores as a sideline were also involved.The study of Shingyo's books reveals that Kyoto bookstores in the late Edo period sold religiously-funded Machihan and Teraban(temples's Hanpon)in Kyoto and its surrounding area and compiled new Kangebon(religiously-funded books).In the Meiji era, Shingyo's books were sold through Kyoto-Osaka bookstores as small Hanpon or books.This may have been because of the appeal of the general Buddhist content of Shingyo's books and the proliferation of religious teachings at that time.

研究分野：書誌学

キーワード：出版 19世紀 仏書

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

信暁は近世後期に京や大坂で活躍した真宗の僧侶である。佐竹淳如『勤王護法 信暁学頭』(昭和11年刊)に拠ると、信暁は安永3年(1774)に美濃国不破郡の長源寺(大谷派)に誕生した。その後、彼は上洛して仏学を修め、真宗佛光寺派本山佛光寺に帰参し、その学頭を勤め、派内の僧侶へ教授し、また、その門信徒への布教に努めた。文政4年(1821)、信暁は佛光寺門前に大行寺を創建し、その初代住職に就任し、学究と布教の生涯を送った。安政5年(1858)死去。享年85歳であった。

私は平成26~28年度にかけて「大行寺信暁に関する書誌学的研究」(科研費・基盤(c))が採択されて、信暁の著書に関する書誌学的調査を実施し、その成果として信暁の著書94点166種の書誌を確認することができた。この94点の内訳を記すと、板本が43点(一枚摺りを含む)、写本が27点(板本と写本が両方現存する2点を含む)、書名のみで書物の現存が確認できないものが26点であった。なお、この成果は「大行寺信暁書誌目録」(科研費報告書、平成29年3月刊)として公表された。

近世京都の真宗寺院の出版に関する研究は、佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿』(伝久寺、昭和48年)、宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』(同朋社、昭和57年)をはじめとして、近年では和田恭幸、万波寿子による諸論文が発表されているが、これらの先行研究は本願寺などの本山が手掛けた出版物に関するものが中心で、その対象は末寺の出版には及んでいない。また、近代京都の仏教書の出版については、『京都書肆変遷史』(京都府書店協同組合、平成6年)をはじめ、磯部敦「説教学全書の制作費用 明治20年代後半、京都の本屋 文栄堂の史料から」(『日本出版史料』10、平成17年)などの先行研究があるが、未だ十分に解明されているとはいえない状況である。

2. 研究の目的

本研究では、江戸後期から明治中期における大行寺という京都の真宗末寺の出版について、「大行寺信暁に関する書誌学的研究」(科研費・基盤(c))で得られた研究成果を基盤として、その全体像を研究する。具体的には下記の2点の解明を研究の目的とする。

第1に江戸後期から明治中期にかけて出版された信暁の板本の蔵板者、並びに明治期に出版された信暁の著書の著作権所有者・発行者について、信暁の板本・書籍を資料として、それらを帰納的に整理・分析することによって解明する。

第2に江戸後期から明治中期にかけて出版された信暁の板本の弘通所・発売所、並びに明治期に出版された信暁の著書の売捌所・販売店について、信暁の板本・書籍を資料として、それらを帰納的に整理・分析することによって解明する。

3. 研究の方法

第1の研究目的を達成するための方法は以下の通りである。まず「大行寺信暁書誌目録」(既出)を基礎資料として、江戸後期に刊行された板本ごとにその奥付・刊記に記載された蔵板者を調査する。次に蔵板者別に板本を整理し、その書誌的並びに内容的な特徴について考察する。そして、江戸後期の板本の分析結果を踏まえて、明治期の信暁の著書の奥付に記載された著作権所有者並びに発行者を調査する。その後、著作権所有者・発行者別に書籍を整理し、その書誌的並びに内容的な特徴について考察する。

第2の研究目的を達成するための方法は以下の通りである。まず「大行寺信暁書誌目録」(既出)を基礎資料として、江戸後期に刊行された板本ごとにその奥付・刊記に記載された弘通所を

調査する。次に蔵板者の研究で得られた成果に基づいて、蔵板者別に弘通所を整理し、その書誌的並びに内容的な特徴について考察する。そして、江戸後期の弘通所の分析結果を踏まえて、明治期の信暁の著書の奥付に記載された売捌所・販売店について調査する。そして、蔵板者の研究で得られた成果に基づいて、蔵板者別に売捌所を整理し、その書誌的並びに内容的な特徴について考察する。また明治期に刊行された信暁の書籍に付録された広告文を通してその販売実態を解明する。

上記2点の研究に際しては、宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』（同朋社、昭和57年）、『京都書肆変遷史』（京都府書店協同組合、平成6年）、井上隆明『増補改訂 近世書林板元総覧』（青裳堂出版、平成10年）などの京都出版史関係図書、『明治前期書目集成』（ゆまに書房、昭和50年）並びに『仏教書出版360年』（法蔵館、昭和53年）、万波寿子『近世仏書の文化史』（法蔵館、平成30年）などの仏教書に関する先行研究を参考にしながら進めた。

4. 研究成果

(1) 信暁の著書の蔵板者・発行者

江戸後期に出版された信暁の板本は25点である。その25点は寺板と町板とに大別できる。寺板は(a)大行寺蔵板本、(b)本山佛光寺蔵板本、(c)大行寺と本山佛光寺の相合板、(d)大行寺・佛光寺以外の寺院が施本として出版したもの、の4種類に分類できる。町板は(e)町板のみもの、(f)町板から寺板になったもの、(g)寺板から町板になったもの、(h)施本、(i)施本から町板になったもの、の5種類に分類できる。江戸後期に信暁の板本を町板として出版した本屋がすべて京都の本屋であった。

江戸後期に刊行された25点のうち、明治時代以降も発行されたのは12点であった。明治時代に刊行された信暁の著書はすべて書店によるものであり、大行寺・本山佛光寺が板元・発行所となることはなかった。また、明治期に信暁の著書の発行所は江戸後期と同じく京都の書店が中心であった。

明治期に刊行された信暁の著書の中で著作権については、『四十八願得聞鈔』（半紙本）の著作権はその出版人である永田調兵衛（文昌堂）が持ち、『説教／五悪段因果実験録』は大行寺第6世淳如が有し、『無量寿経 五悪壇鼓吹』は西村七兵衛が、『説教／往生要集勸導辯』は沢田友五郎（文栄堂）がそれぞれ所有したが、それ以外は著作権の申請はなされなかった。

明治期に刊行された信暁の著書は、明治10年代中頃からは小本（整版）の刊行が中心となり、同20年代中頃には活版刷りの洋装本として刊行された。活版刷りの洋装本では、「通俗」「講話」「説教」といった言葉を書名に使用する傾向が認められる。また、明治時代になって新たに発行された信暁の7点の著書はすべて、信暁が生前に行なった説教（講話）を筆記・記録したノートを原稿として、書店がそれを編集し、発行した説教本であった。

このように信暁の著書が明治以降も発行され続けた理由は、まず彼の著書に通仏教的な傾向が認められること、そして時代背景として説教の隆盛が考えられるであろう。

(2) 信暁の著書の弘通・販売

江戸後期に於ける信暁の板本は、彼が住職を勤める大行寺（京）とその掛所である高庵（大坂）大行寺の本山にあたる佛光寺（京）そして本屋を介して、その多くは京・大坂を中心に弘通していたと考えられる。信暁の板本で三都の本屋で扱われた書籍は4点であり、取り分け『山海里』は三都のみならず信州や肥後、肥前の本屋がその弘通所となっていた。また、大行寺蔵板本の弘通には本屋が本業ではなく、本屋以外に何か本業があって、副業として信暁の著書の出版に携わったのではないかと推測される本屋が携わっていた。また板元（信暁）

の親類縁者を介しての弘通も確認された。大行寺蔵板本の弘通には、こうした副業としての本屋の存在が注目されるであろう。副業としての本屋の活動については、管見に従えば、これまでほとんど研究されていないようであるが、近世の出版を研究する上で、こうした副業としての本屋の活動に今後は留意する必要があるだろう。

明治期に於ける信暁の著書の販売・流通を概観すると、江戸後期に寺板（大行寺蔵板・本山佛光寺蔵板）として刊行された『阿弥陀経即生篇』『観経隠彰義』『四十八願得聞鈔』等の信暁の板本は、京都の本屋、沢田友五郎と永田調兵衛・同長左衛門がその版權を所有し、京都を中心に販売されていた。その後、明治13年（1880）から同24年（1891）までの十年間は沢田友五郎、西村九郎右衛門、西村七兵衛が和装本の小本を相次いで発行したが、その販売店（「発売所」）は引き続き京都が中心であった。そうした中において、明治24年（1891）に西村九郎右衛門が出版した『三帖和讃歡喜鈔』（和装本・小本）には、東北の盛岡から九州の熊本まで12名の書店が販売店として掲載されている。その後、明治23年（1890）から活版印刷の洋装本が始まると、その販売店数は飛躍的に増えた。同25年（1892）9月に、京都の顕導書院・西村護法館を発行所が発行された『通俗 仏教百科全書』（活版印刷本）は引き続き京都が中心であったが、そこに東京や大阪、名古屋といった大都市を加え、更に東北地方、北陸地方、九州まで広げ、計40名の販売店（大売捌所）をその奥付に記している。また同26年（1893）5月、京都の顕道書院から発行された『五帖一部 御文章講話』（活版印刷本）の奥付には、「特別大売捌所」が11名、「大売捌所」が32名、計43名が記載されている。このように明治20代中頃には、全国的な販売網が成立したことが確認できるのである⁶。そして、その取次を担う書店を見ると、仏教書は一般書籍とは別のルートが存在していたことが考えられるのである。

(3) 勸化本の編纂と板木の流れ

信暁の著書（板本）の研究を通して、江戸後期の京都で、丁数の少ない勸化本を数点合わせ綴じて、新たに1冊の勸化本に仕立て直し、町板の相合板として刊行されたものが散見されることに気付いた。そこで、私は、その中から『信後相続 / 歡喜いろは伝』、『真宗相続 / 歡喜章』、『信後相続 / 歡喜嘆』の3点を取り上げて、その刊記・奥付・版心に着目し、その編纂と板木の流れを具体的に解明した。これは研究開始当初は予期していなかったことであるが、本研究の派生的な成果として記しておく。

『信後相続 / 歡喜いろは伝』（刊年未詳）は、京都の本屋、永田文昌堂・菱屋友七・菱屋卯助の相合板として刊行されたものである。本書は信暁校述『信後相続 / 歡喜法の道』（京都・文栄館〔菱屋友七〕蔵板）と同著『法のゑん』（筑前・法光寺蔵板 京都・菱屋卯助蔵板）と昨非庵著『六字の操言』（京都・昨非庵蔵板 永田文昌堂蔵板か）の3書を合わせ綴じて、『信後相続 / 歡喜いろは伝』という新たな1冊の勸化本に仕立て直したもので、永田を中心とする菱屋一党による相合板である。

『真宗相続 / 歡喜章』（刊年未詳）は、京都の本屋、丁子屋庄兵衛・同定七の相合板として刊行されたものである。本書は『信後相続 / 歡喜法の道』（既出）と諦住著『安心よるこび草』（京都・池田屋七兵衛・同利兵衛蔵板）とを合わせて綴じたもので、京都の本屋の間で板木が売買され、相合板として刊行されたケースである。

『信後相続 / 歡喜嘆』（嘉永四年官許）は京都の本屋、杏林堂と文華堂が相合板として刊行したものである。本書は荒井玉泉堂著『信後相続 / 歡喜嘆』（単体）と同『御当流領解前 / 順仰一すじ道』と同『御当流領解前 / いろは歌』の3書を合わせて綴じたものである。玉泉堂の上記の3書はすべて近江の玉泉堂から町板として刊行され、その後、天保13年（1842）

に金沢の増山屋平右衛門が玉泉堂から上記 3 点の板木を買取り、それらを 1 冊本に仕立て直し、『信後相続 / 歡喜嘆』として刊行した。その後、増山屋板『歡喜嘆』は嘉永 4 年(1851)に京都の本屋、杏林堂と文華堂へ、そして慶応元年には京都の沢田文栄堂と永田文昌堂へと、その板木が移っている。

こうした考察の結果、江戸後期の京都で仏書を中心に扱う本屋が、同じ京都の本屋が所有する勸化本の板木は勿論のこと、地方の町板による勸化本や地方の寺板の勸化本にも注意を払い、その板木の売買或いは譲渡を行っていた様子が具体的に明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 膽吹覚	4. 巻 22
2. 論文標題 大行寺信暁の著書の板元・発行者・版權	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書物・出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 膽吹覚	4. 巻 44
2. 論文標題 近世後期、京都における勸化本の編纂と板木の流れ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 仏教文学	6. 最初と最後の頁 159-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 膽吹覚	4. 巻 10
2. 論文標題 長谷山大行寺『寄附人名録』について 近世後期、京都に於ける真宗寺院の新寺建立と出版物	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 芸文稿	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 膽吹覚	4. 巻 19
2. 論文標題 大行寺信暁の施本	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 書籍文化史	6. 最初と最後の頁 113-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 膽吹覚	4. 巻 63
2. 論文標題 大行寺信暁『三帖和讃歡喜鈔』の板元と弘通	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国文学論叢	6. 最初と最後の頁 40-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 膽吹覚	4. 巻 57
2. 論文標題 大行寺信暁『いろはうた』の諸本	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語国文学	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 膽吹覚	4. 巻 25
2. 論文標題 江戸後期から明治中期における仏書の弘通・販売 大行寺信暁の著書を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 書物・出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 膽吹覚
2. 発表標題 近世後期、京都における勸化本の編纂と板木の流れ
3. 学会等名 仏教文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 膽吹寛
2. 発表標題 近世後期、真宗末寺の出版における板元について 大行寺信暁の著書（板本）を通して
3. 学会等名 「書物・出版と社会変容」研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----